

学習者の意識・経験からみた体育カリキュラムの ジェンダー・ポリティクス —性別二元制・異性愛主義に着目して—

井谷 恵子・三上 純*・井谷 聡子**・関 めぐみ***

Gender politics of physical education curriculum from learners' perspectives and experiences :
Focusing on gender binary system and heterosexism

Keiko ITANI, Jun MIKAMI, Satoko ITANI, Megumi SEKI

Accepted June 19, 2018

抄録: 学校教育が性別二元制と異性愛主義を基盤として構築されていることによる問題点が指摘されている。本研究の目的は、ジェンダー・セクシュアリティの観点から保健・体育に対する意識やそこでの経験を明らかにすることであった。このため、規範的な性別二元的カテゴリーに、「規範的でない性」のカテゴリーを加えた。

運動・スポーツ活動に関しては、「規範的女性」及び「規範的でない性」に比べて、「規範的男性」が積極的に関わり、運動・スポーツを好む傾向が高かった。「規範的でない性」は、体育授業における嫌な経験が多く、体育授業に対する忌避感の経験も高い結果となった。一方、性的マイノリティに対する加害見聞については、「保健・体育の授業以外」で、「規範的でない性」が有意に高かった。また、性的マイノリティに対する被害経験は、「規範的でない性」が有意に高く、性的マイノリティについての認識や意識の差異が推測できた。

索引語: セクシュアリティ, 規範的性別, 周辺化, 性的マイノリティ, 二極化

Abstract: Researchers have pointed out the issues in school education that is based on gender binary system and heterosexism. The purpose of this study is to reveal learners' attitudes toward and experiences of physical and health education from gender and sexuality perspectives. For the purposes of this study, a "non-normative gender" category is added to the conventional binary gender categories of male and female.

The result shows that "normative men" (cis-gendered, heterosexual) tend to participate more actively in and enjoy sport and exercise more than "normative women" (cis-gendered, heterosexual) and the persons of "non-normative" (transgender and/or non-heterosexual) gender/sexuality. The persons of "non-normative" gender/sexuality tend to have more negative experiences and negative attitudes toward physical education. Furthermore, the persons of "non-normative" gender/sexuality are more likely to recognize the violence against sexual minorities than the majority counterparts outside of health and physical education. Also, the persons of "non-normative" gender/sexuality are more likely to experience violence, which suggests that the awareness among people about sexual minorities could help reduce the violence against these sexual minorities.

Key Words: Sexuality, normative gender, marginalization, sexual minority, polarization

* 京都教育大学教育学研究科教科教育専攻

** 関西大学文学部

*** 京都光華女子大学女性キャリア開発研究センター

1. 問題の所在

(1) 体育カリキュラムとジェンダー・ポリティクス

日本が1985年に女性差別撤廃条約を批准し、これに伴って男女平等カリキュラムが導入（1989年）されてから30年近くが経過している。しかし、体育の学習経験についての調査では、ダンス、武道をはじめとしたカリキュラム上の男女差が報告されている（日本スポーツとジェンダー学会，2016）。また、「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果報告においては、運動をする子どもとしない子どもの二極化現象が見られること、特に中学生女子にその現象が顕著であるとして、運動時間が少ない中学生女子ほど、保健体育の授業が「苦手」「嫌い」「楽しくない」と答える傾向が強いと分析している（文部科学省，2014a）。この調査は、全国の小学校5年生と中学校2年生すべてを対象に、平成20年度から毎年実施されており、平成29年度の結果報告においても、小学校から中学校への進学に伴って、運動時間が増加する生徒と減少する生徒に二極化しており、女子は男子に比べて運動時間が減少する生徒の割合が高いことが示されている（文部科学省，2018）。

この問題の背景として、制度上のカリキュラムと実際に計画され実行されるカリキュラム、経験されるカリキュラムには差異があるというカリキュラムの階層性を検討する必要がある（田中，2000）。つまり、学校で実行され、子ども達によって経験されるカリキュラムは、学習指導要領など明示化された教育課程だけではなく、教育委員会や学校の方針、教師の働きかけ、学習集団の相互作用など多様な権力作用の総和であるという理解である。この意味で、カリキュラム・ポリティクスとは、政策や法律、制度のような明示的で強い権力だけではなく、社会全体に深く広く根を張り、人々の意識や態度、行動に影響を与える権力の総和として把握できる。例えば、ジェンダー形成は、男女平等を掲げた公的なカリキュラムのもとで潜在的に機能する教育作用である。学校が男女平等の原則が徹底された場ではなく、隠れたカリキュラムとして進路選択をはじめとして、運動・スポーツへの意識や関わり方の男女差に影響を及ぼすことが指摘されてきた（木村，1999）。多賀（2005）は、教育における男子の社会化に視点を向け、普遍的な基準自体が「男性化」されたものであると述べている。その前提として、政治や経済など「公領域」自体に男性を「普遍的市民」とし、女性を「二流市民」として排除する作用があり、「男らしさ」を定義する「競争」や「勝利」が公領域の主要な価値を形作ってきたことを指摘している。さらに、教育における「男性支配の正当化装置」としてスポーツを提示し、体育授業だけでなく、学校行事や運動部活動を通じて、男性が女性よりも優れていることを巧妙に浸透させていると主張する。

日本の体育カリキュラムは、体づくり運動や表現・ダンスを除くと、近代スポーツを中心に内容構成されている。体育授業だけでなく学校体育全般で扱われるサッカーや陸上競技などの近代スポーツには、19世紀後半から男性の教育機能と近代社会の発展を主導した男性的原理が内包されている。近代スポーツの中心原理は競争であり、勝者となること、序列の上位にあることが「男らしさ」の証明として機能するだけでなく、近代社会の価値観を映し出す文化として普及してきた。井谷（2018）は、近代スポーツ中心に構成された体育カリキュラムでは、生活に根ざした運動やレジャー、ダンスよりも競技スポーツの価値が高まり、男女の差異と男性の優位性を際立たせる結果になることを指摘している。国内外の学校でのフィールド研究からも、授業や体育・スポーツ活動が男女を二分し、男女差を際立たせ、男子生徒に男らしさを身につけさせる機能があることが明らかにされている（アスキュー・ロス，1997；片田，2008）。

(2) 教育における性別二元制と異性愛主義

一方、男らしさの証明、男性優位な文化として発展してきた近代スポーツは、性別二元制や異性愛主義の呪縛から逃れられない宿命を持つ。教育も含め、社会のあらゆる場面で女・男という二つのカテゴリーが適用され、人々の意識を形成することを通じて、性別二元制と異性愛主義は一体となって社会制度の強固な基盤となっている。男女という二つのカテゴリーに分けることによって、男女それぞれにステレオタイプな役割や特性を社会的に付与する結果を生み出している。例えば、体力では男女の分布に重なりがあり、男性平均値よりも高い女性もいれば、女性平均値よりも低い男性も存在する。ダンスが好きな男性もいれば、武道に熱中する女性もいるなど、男女というカテゴリーだけで特性や能力を説明できないという事実である。

このような性別二元制の根底には、男女を生物学的に二つのカテゴリーに分けることができるという一般的な認識がある。女・男という規範的な性別やこれに基づく社会制度は、そこに当てはまらない性的マイノリティ¹⁾という存在を周辺化し、不可視化する働きをする。性の説明は、遺伝子、外性器、内性器、性自認、性的指向など多様な次元からなされ、この結果、性のありかたは女・男の二つの性に限定されるものではない(藤原, 2018; 井谷, 2018; 森山, 2017)。性的マイノリティの存在については、近年、企業などによる調査やダイバーシティ推進などの取組などによって社会的な認知が広がっている。株式会社電通による調査(2015)では、LGBT¹⁾と呼称され、商品・サービス市場の有力なターゲットと目されている。いくつかの企業等による調査では、性的マイノリティの人口規模について、5.9%から8.0%という結果が公表されているが、公的な統計は存在していない(中西, 2017)。

学校教育においても、性別二元制と異性愛主義は基盤となっており、教育実践に深く根を張ってきたが、いじめや自殺など深刻な教育課題が明らかになるにつれ、対応にわずかな変化が見られる。文部科学省は、「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を実施し、その結果を踏まえ、性同一性障害を含めた性的マイノリティへの配慮を求める通知を出している(文部科学省, 2014b; 2015)。その翌年には、「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」という教職員向けの資料を公表し、支援の事例として、水泳では「上半身が隠れる水着の着用を認める」、運動部活動では「自認する性別に係る活動への参加を認める」などを示すに至っている(文部科学省, 2016)。しかし、平成29年改訂の学習指導要領の記述に関しては、「いわゆる『性的マイノリティ』について指導内容として扱うことは、個々の児童生徒の発達の段階に応じた指導、保護者や国民の理解、教員の適切な指導の確保などを考慮すると難しいと考えている」(中西, 2017, p.13)とし、小学校の保健領域には「異性への関心が芽生える」、中学校学習指導要領保健体育の保健分野には「異性への関心が高まったりする」との記述が残ることとなった。

人権問題に関する国際的な NGO である HRW (Human Rights Watch, 2016) は、性的マイノリティ当事者へのインタビュー調査の結果をまとめた「出る杭は打たれる 日本の学校における LGBT 生徒へのいじめと排除」を公表し、日本の学校教育はステレオタイプの考え方に支配されていること、当事者の子ども達の困難な状況、政府の対策の遅れなどを指摘している。一方、保守的な学校文化の中で、性的マイノリティへの配慮を求められる学校教員の戸惑いも明らかにされている。日高(2015)は、学校教員への調査結果から、教員が性的マイノリティに関する学習指導を必要と感じている反面、知識が不十分であり、実際の指導経験も乏しいことを明らかにしている。

体育・保健体育の授業を含め学校体育は、近代スポーツが持つ性別二元制と異性愛主義を基盤とした強固なジェンダー・ポリティクスが性的マイノリティをさらに周辺化する作用をしていると推測される。

(3) 研究目的

以上から、体育・保健体育のカリキュラムにおいて、性別二元制や異性愛主義を中心としたジェンダー形成を強化する潜在的なポリティクスが機能していることが認められる。近代スポーツをカリキュラムの中心に据えた体育・保健体育では、女性だけでなく、運動・スポーツの弱者や性的マイノリティの人々にとって、安心して学習し活動できる内容と場を提供しているかどうかについて再検討し、必要な改革や配慮が求められる（井谷・井谷，2016）。しかし、ジェンダー・ポリティクスの視点から学校体育を批判的に検討した研究は蓄積が少なく、学校体育において困難な経験をするなど周辺化される人々に焦点化した実証的な研究は見当たらない。

本研究では、男・女という規範的な二元的カテゴリーに、規範に当てはまらない性のカテゴリーを加えて、ジェンダー・セクシュアリティの観点から体育・保健体育に対する意識やそこでの経験を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

(1) 質問紙の構成

質問紙は全 32 項目からなり、その内容は対象者の基本的属性 9 項目、体育授業に対する意識・経験 11 項目、性的マイノリティに関する経験 12 項目から構成した。

(2) 調査期間

2017 年 4 月中旬から 5 月上旬。

(3) 対象

近畿地域の 3 つの大学に在籍する初年次学生 979 名。属性に記入がないものを除き、20 歳以下の初年次の学生 953 名を分析の対象とした。小学校から高等学校における学校期の経験や意識を主な調査内容としているため、高校卒業後から長期間経過しているものは分析の対象として不適切と判断した。

(4) 調査への参加

個人の自由意志による協力を求め、封筒に入れた無記名の回答紙を研究者・協力者がその場で回収した。

(5) セクシュアリティ

対象者に、「1 戸籍上の性・2 性自認・3 性的指向」の回答を求め、「1 男・2 男・3 女」であれば「規範的男性」，「1 女・2 女・3 男」であれば「規範的女性」，それ以外の回答であれば「規範的でない性」としてカテゴリーを行った。

(6) 本研究の位置付け

本研究は、体育・保健体育において、周辺化され不可視化された個人の経験を明らかにするために、1) 学校期において運動やスポーツから離脱する人々の経験 2) 性的マイノリティとして困難を味わってきた人々の経験 に着目し、①大学での一般学生を対象とした質問紙調査 ②周辺化された経験を持つ当事者へのインタビュー調査 から構成される研究のうち、「①大学での一般学生を対象とした質問紙調査」についての報告である。

3. 結果及び考察

(1) 回答者の属性

1) 専攻分野・性別・セクシュアリティ

回答者は3つの大学に在籍する学生であり、専攻は人文科学、自然科学、社会科学など幅広い分野である。回答者のセクシュアリティは表1のとおりである。戸籍上の性は男性が387名(40.6%)、女性が566名(59.4%)であり、性自認は男性が386名(40.5%)、女性が563名(59.1%)、それ以外という人が3名(0.3%)であった。性的指向が男性である人は536名(56.4%)、女性が381名(40.1%)、両性が24名(2.5%)、どちらでもない人が10名(1.1%)であった。これらの回答から、「規範的男性」が368名(38.7%)、「規範的女性」が525名(55.3%)、「規範的でない性」が57名(6.0%)であった。

表1 回答者のセクシュアリティ

	男性	女性	それ以外	両性	どちらでもない	合計
戸籍上の性	387 (40.6%)	566 (59.4%)	－	－	－	953
性自認	386 (40.5%)	563 (59.1%)	3 (0.3%)	－	－	952
性的指向	536 (56.4%)	381 (40.1%)	－	24 (2.5%)	10 (1.1%)	951

2) 運動との関わり方

回答者のこれまでのスポーツ経験及び、今後の運動・スポーツとの関わり方について表2及び表3にまとめた。中学校で運動部活動に「卒業まで所属」した人は605名(63.7%)、「途中まで所属」した人は61名(6.4%)、「所属しなかった」人は273名(28.7%)、「その他」と回答した人が11名(1.2%)であった。高校で運動部活動に「卒業まで所属」した人は444名(46.7%)、「途中まで所属」した人は86名(9.0%)、「所属しなかった」人は407名(42.8%)、「その他」と回答した人が14名(1.5%)であった。「その他」について、中学校では「吹奏楽・合唱」「クラブチーム」など、高校ではそれらに加えて「マネージャー」「社会人チーム所属」という回答が見られた。

表2 運動部活動等への所属状況

	卒業まで所属	途中まで所属	所属しなかった	その他	合計
中学校	605 (63.7%)	61 (6.4%)	273 (28.7%)	11 (1.2%)	950
高校	444 (46.7%)	86 (9.0%)	407 (42.8%)	14 (1.5%)	951

表3 今後の運動・スポーツとの関わり方

	大学 体育会	大学運動 系サークル	学外競 技クラブ	地域フィット ネスクラブや レクリエーシ ョンスポーツ クラブ	所属なしだ が、野外活動 や運動を楽 しむ	関わり なし・予 定なし	その他	合計
今後の 関わり	175 (19.0%)	357 (38.7%)	9 (1.0%)	8 (0.9%)	145 (15.7%)	216 (23.4%)	13 (1.4%)	923

今後の運動への関わり方（予定を含む）について、「大学体育会」が175名（19.0%）、「大学運動系サークル」が357名（38.7%）、「学外競技クラブ」が9名（1.0%）、「地域フィットネスクラブやレクリエーションスポーツクラブ」が8名（0.9%）、「所属なしだが野外活動や運動を楽しむ」人が145名（15.7%）、「関わりなし・予定なし」が216名（23.4%）、「その他」と回答した人が13名（1.4%）であった。「その他」の中には、「体育の授業」「習い事」「毎朝のラジオ体操」「体育会マネージャー」「大学のジム通い」「スポ少のコーチ」という回答があり、「未定」という人も見られた。

(2) 運動・スポーツ活動とセクシュアリティ

回答者のセクシュアリティと運動・スポーツとの関わり方についてクロス集計を行い、関係性について検討した。

1) 過去のスポーツ経験

回答者に、中学校・高校時に運動部活動に所属していたかどうかの回答を求めたが、「その他」と回答した人数が中学校で11名、高校で14名と少なかったことから、「その他」と回答した人を除いて分析を行った。表4が中学校、表5が高校に関する分析結果である。中学校では、「卒業まで所属」の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」及び「規範的でない性」が有意に低かった。「途中まで所属」の割合は「規範的女性」が有意に低く、「規範的でない性」が有意に高かった。「所属しなかった」割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。高校では、「卒業まで所属」の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「途中まで所属」の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「所属しなかった」割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。

表4 中学校時の運動部活動所属状況

	卒業まで所属	途中まで所属	所属しなかった	合計
規範的男性	291 (80.8%) △**	27 (7.5%)	42 (11.7%) ▽**	360
規範的女性	286 (55.1%) ▽**	26 (5.0%) ▽*	207 (39.9%) △**	519
規範的でない性	26 (45.6%) ▽**	8 (14.0%) △*	23 (40.4%)	57
合計	603 (64.4%)	61 (6.5%)	272 (29.1%)	936

χ^2 値=93.36 Cramer's V=0.223

△：有意に高い ▽：有意に低い *：p<.05 **：p<.01

表5 高校時の運動部活動所属状況

	卒業まで所属	途中まで所属	所属しなかった	合計
規範的男性	227 (62.5%) △**	42 (11.6%) △*	94 (25.9%) ▽**	363
規範的女性	194 (37.7%) ▽**	37 (7.2%) ▽**	283 (55.1%) △**	514
規範的でない性	21 (36.8%)	7 (12.3%)	29 (50.9%)	57
合計	442 (47.3%)	86 (9.2%)	406 (43.5%)	934

χ^2 値=76.47 Cramer's V=0.202

△：有意に高い ▽：有意に低い *：p<.05 **：p<.01

2) 今後の運動・スポーツとの関わり方

回答者に今後の運動・スポーツとの関わり方について回答を求めたが、「学外の競技的なクラブスポーツに所属している、または所属予定」「地域のフィットネスクラブやレクリエーションを目的としたスポーツクラブなどに参加している、または参加予定」「その他」と回答した人数がそれぞれ9名、

8名、13名と少なかったことから、これらの回答をした人を除いて分析を行い、その結果を表6にまとめた。「大学体育会」の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「大学運動系サークル」と「所属なしだが野外活動や運動を楽しむ」という人の割合は「規範的でない性」が有意に低かった。「関わりなし・予定なし」の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」及び「規範的でない性」が有意に高かった。

表6 今後の運動・スポーツとの関わり方

	大学体育会	大学運動系サークル	所属なしだが野外活動や運動を楽しむ	関わりなし・予定なし	合計
規範的男性	87 (25.9%) △**	147 (43.8%)	55 (16.4%)	47 (14.0%) ▽**	336
規範的女性	75 (15.0%) ▽**	197 (39.4%)	86 (17.2%)	142 (28.4%) △**	500
規範的でない性	13 (24.1%)	13 (24.1%) ▽*	3 (5.6%) ▽*	25 (46.3%) △**	54
合計	175 (19.7%)	357 (40.1%)	144 (16.2%)	214 (24.0%)	890

χ^2 値=50.62 Cramer's V=0.169

△：有意に高い ▽：有意に低い *: $p<.05$ **: $p<.01$

(3) 体育の好き嫌いとセクシュアリティ

「これまで受けてきた体育の授業は好きでしたか」という項目に対し、「好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」の4件法で、「小学校前半」「小学校後半」「中学校」「高校」のそれぞれの年代について回答を求めた。その回答について、回答者のセクシュアリティからクロス集計を行い、分析をした。

1) 学校段階別

体育の好き嫌いについて学校段階ごとに分析を行い、「小学校前半」から「高校」まで、それぞれ表7～表10にまとめた。「小学校前半」では、「好き」と回答した人の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「どちらかといえば好き」という人の割合は「規範的女性」が有意に高かった。「どちらかといえば嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。「嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的でない性」が有意に高かった。「小学校後半」では、「好き」と回答した人の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「どちらかといえば好き」という人の割合は「規範的女性」が有意に高く「規範的でない性」が有意に低かった。「どちらかといえば嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。「嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」及び「規範的でない性」が有意に高かった。「中学校」では、「好き」と回答した人の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「どちらかといえば嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。「嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的でない性」が有意に高かった。「高校」では、「好き」と回答した人の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。「どちらかといえば嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。「嫌い」という人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」及び「規範的でない性」が有意に高かった。

表 7 体育授業の好き嫌い（小学校前半）

	好き	どちらかといえ ば好き	どちらかといえ ば嫌い	嫌い	合計
規範的男性	252 (68.5%) Δ^{**}	63 (17.1%)	34 (9.2%) ∇^{**}	19 (5.2%) ∇^{**}	368
規範的女性	259 (49.3%) ∇^{**}	119 (22.7%) Δ^*	98 (18.7%) Δ^{**}	49 (9.3%)	525
規範的でない性	31 (54.4%)	9 (15.8%)	7 (12.3%)	10 (17.5%) Δ^{**}	57
合計	542 (57.1%)	191 (20.1%)	139 (14.6%)	78 (8.2%)	950

 χ^2 値=42.24 Cramer's V=0.149 Δ ：有意に高い ∇ ：有意に低い *: $p<.05$ **: $p<.01$

表 8 体育授業の好き嫌い（小学校後半）

	好き	どちらかといえ ば好き	どちらかといえ ば嫌い	嫌い	合計
規範的男性	248 (67.6%) Δ^{**}	62 (16.9%)	41 (11.2%) ∇^{**}	16 (4.4%) ∇^{**}	367
規範的女性	251 (47.8%) ∇^{**}	119 (22.7%) Δ^*	101 (19.2%) Δ^{**}	54 (10.3%) Δ^*	525
規範的でない性	30 (52.6%)	5 (8.8%) ∇^*	12 (21.1%)	10 (17.5%) Δ^{**}	57
合計	529 (55.7%)	186 (19.6%)	154 (16.2%)	80 (8.4%)	949

 χ^2 値=47.05 Cramer's V=0.157 Δ ：有意に高い ∇ ：有意に低い *: $p<.05$ **: $p<.01$

表 9 体育授業の好き嫌い（中学校）

	好き	どちらかといえ ば好き	どちらかといえ ば嫌い	嫌い	合計
規範的男性	220 (59.8%) Δ^{**}	79 (21.5%)	50 (13.6%) ∇^*	19 (5.2%) ∇^{**}	368
規範的女性	226 (43.0%) ∇^{**}	133 (25.3%)	104 (19.8%) Δ^*	62 (11.8%)	525
規範的でない性	22 (38.6%)	10 (17.5%)	9 (15.8%)	16 (28.1%) Δ^{**}	57
合計	468 (49.3%)	222 (23.4%)	163 (17.2%)	97 (10.2%)	950

 χ^2 値=49.22 Cramer's V=0.161 Δ ：有意に高い ∇ ：有意に低い *: $p<.05$ **: $p<.01$

表 10 体育授業の好き嫌い（高校）

	好き	どちらかといえ ば好き	どちらかといえ ば嫌い	嫌い	合計
規範的男性	224 (60.9%) Δ^{**}	97 (26.4%)	29 (7.9%) ∇^{**}	18 (4.9%) ∇^{**}	368
規範的女性	253 (48.2%) ∇^{**}	150 (28.6%)	73 (13.9%) Δ^*	49 (9.3%)	525
規範的でない性	24 (42.1%)	15 (26.3%)	9 (15.8%)	9 (15.8%) Δ^*	57
合計	501 (52.7%)	262 (27.6%)	111 (11.7%)	76 (8.0%)	950

 χ^2 値=25.84 Cramer's V=0.117 Δ ：有意に高い ∇ ：有意に低い *: $p<.05$ **: $p<.01$

2) 好きな期間

体育の授業が「好き」「どちらかといえば好き」と回答した数に着目し、回答者を「好き 0」から「好き 4」までに分類して分析を行い、その結果を表 11 にまとめた。規範的男性は「好き 0」と回答した割合が有意に低く、「好き 4」と回答した割合が有意に高かった。規範的女性及び規範的でない性は「好き 0」と回答した割合が有意に高く、「好き 4」と回答した割合が有意に低かった。

表 11 体育授業の好きな期間

	好き0	好き1	好き2	好き3	好き4	合計
規範的男性	21 (5.7%) ▽**	18 (4.9%)	29 (7.9%)	26 (7.1%)	273 (74.4%) △**	367
規範的女性	77 (14.7%) △**	38 (7.2%)	59 (11.2%)	51 (9.7%)	300 (57.1%) ▽**	525
規範的でない性	12 (21.1%) △*	6 (10.5%)	6 (10.5%)	4 (7.0%)	29 (50.1%) ▽*	57
合計	110 (11.6%)	62 (6.5%)	94 (9.9%)	81 (8.5%)	602 (63.4%)	949

χ^2 値=38.87 Cramer's V=0.143

△：有意に高い ▽：有意に低い *：p<.05 **：p<.01

(4) 体育授業での経験とセクシュアリティ

1) 体育授業での嫌な経験

「体育授業で嫌な経験をしたことがありますか」という項目に対し、「よくあった」「時々あった」「まったくない」の3件法で回答を求めた。その回答について、回答者のセクシュアリティからクロス集計を行い、その結果を表 12 にまとめた。「よくあった」と答えた人の割合が「規範的でない性」に有意に高かった。

表 12 体育授業での嫌な経験

	よくあった	時々あった	まったくない	合計
規範的男性	26 (7.1%)	136 (37.2%)	204 (55.7%)	366
規範的女性	46 (8.8%)	192 (36.9%)	283 (54.3%)	521
規範的でない性	11 (20.0%) △*	21 (38.2%)	23 (41.8%)	55
合計	83 (8.8%)	349 (37.0%)	510 (54.1%)	942

χ^2 値=10.77 Cramer's V=0.076

△：有意に高い ▽：有意に低い *：p<.05

2) 体育授業への忌避感

「体育授業を受けたくないと思ったことがありますか」という項目に対し、「よくあった」「時々あった」「まったくない」の3件法で回答を求めた。その回答について、回答者のセクシュアリティからクロス集計を行い、その結果を表 13 にまとめた。「よくあった」人の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的でない性」が有意に低かった。「時々あった」人の割合は「規範的男性」が有意に低く、「規範的女性」が有意に高かった。「まったくない」人の割合は「規範的男性」が有意に高く、「規範的女性」が有意に低かった。

表 13 体育授業への忌避感

	よくあった	時々あった	まったくない	合計
規範的男性	37 (10.1%) ▽**	136 (37.0%) ▽**	195 (53.0%) △**	368
規範的女性	88 (16.8%)	280 (53.3%) △**	157 (29.9%) ▽**	525
規範的でない性	16 (28.1%) △**	25 (43.9%)	16 (28.1%)	57
合計	141 (14.8%)	441 (46.4%)	368 (38.7%)	950

 χ^2 値=57.84 Cramer's V=0.174

△：有意に高い ▽：有意に低い **：p<.01

また、「よくあった」「時々あった」と回答した人に対し、「体育授業を受けたくないと考えた時、どうしましたか」と質問したところ、「学校を休んだ」人が6名で1.0%、「保健室へ行った」人が16名で2.8%、「見学をした」人は28名で4.8%、「我慢して受けた」人が529名で91.2%、「その他」と回答した人が1名で0.2%であった(図1)。

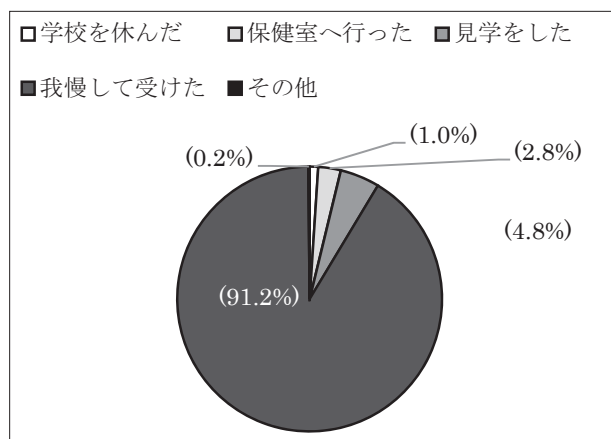


図1 体育授業を受けたくない時の行動

(5) 性的マイノリティに関する経験

1) 学習経験

「小学校・中学校・高校で性的マイノリティについて学習したことがありますか」という問いに対し、「はい」と答えた人は633名で66.8%であった(図2)。「はい」と答えた人に対し、学習の場をたずねた結果を図3に示した。回答は複数回答可である。「保健の授業」と答えた人が394名、「性教育/性感染症などについての講演・特別活動」が181名、「人権学習・道徳の授業」が256名、「その他」と答えた人が9名であった。「その他」の中には、「家庭科」「HIVの授業」「生理生物学の授業」「心理教育の授業」「総合科学の授業」「本で読んだ」「自治会の会報」「劇」「ビデオ」「重要だと思うテーマに関する調べ学習」などの記述があった。なお、この項目についてはセクシュアリティによる差異はないものと考え、全体の集計のみを行った。

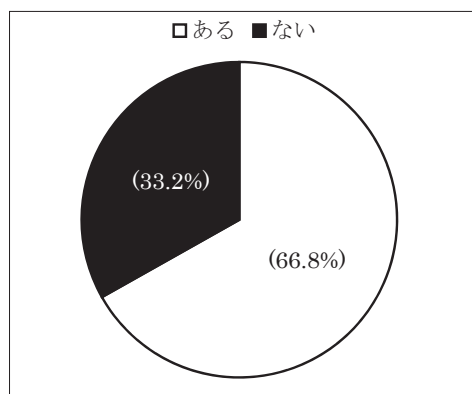


図2 性的マイノリティに関する学習経験

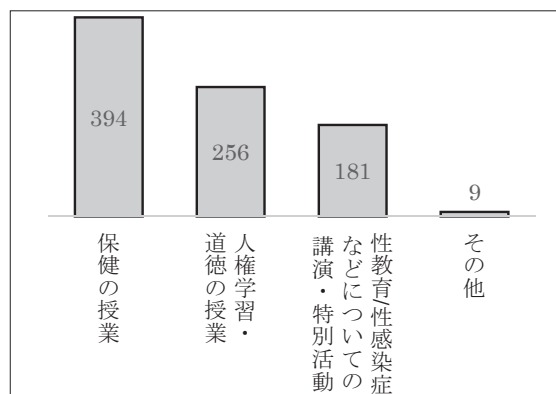


図3 性的マイノリティに関する学習場面 (n=633)

2) 性的マイノリティに対する加害見聞（保健・体育の授業）

「保健・体育の授業で、性的マイノリティに対して差別的な発言をしたりひやかすような態度をとる人を見たり聞いたりしたことはありますか」という質問に対し、「はい」と回答した人は「小学校」で47名(5.0%),「中学校」で53名(5.6%),「高校」で40名(4.2%)であった(図4)。

3) 性的マイノリティに対する加害見聞（保健・体育の授業以外）

「保健・体育の授業以外の場面で、性的マイノリティに対して差別的な発言をしたりひやかすような態度をとる人を見たり聞いたりしたことはありますか」という質問に対し、「はい」と回答した人は「保健・体育以外の授業」で40名(4.2%),「部活動」で20名(2.1%),「休み時間や放課後」で75名(8.0%),「運動会・文化祭など宿泊を伴わない学校行事」で18名(1.9%),「修学旅行・自然学校など宿泊を伴う学校行事」で18名(1.9%),「その他」が11名(1.7%)であった(図5)。「その他」の中には、テレビやインターネットといったメディアや、サークル、自宅などの場面でも加害があったとされている。また、これらの回答について、回答者のセクシュアリティからクロス集計を行い、その結果を表14から表17にまとめた。「性的マイノリティに対して差別的な発言をしたりひやかすような態度をとる人を見たり聞いたりしたことがある」という人の割合は、「保健・体育以外の授業」「部活動」「休み時間や放課後」「修学旅行・自然学校など宿泊を伴う学校行事」において、「規範的でない性」が有意に高かった。

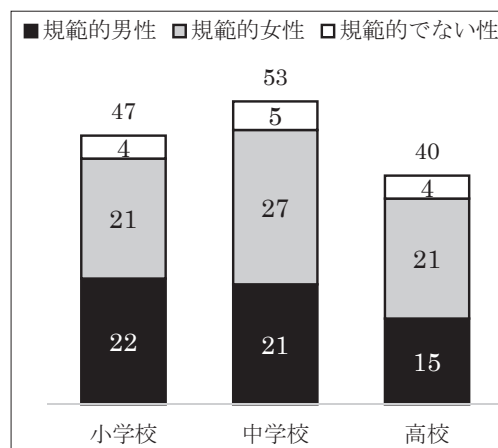


図4 性的マイノリティに対する加害見聞（保健・体育の授業）

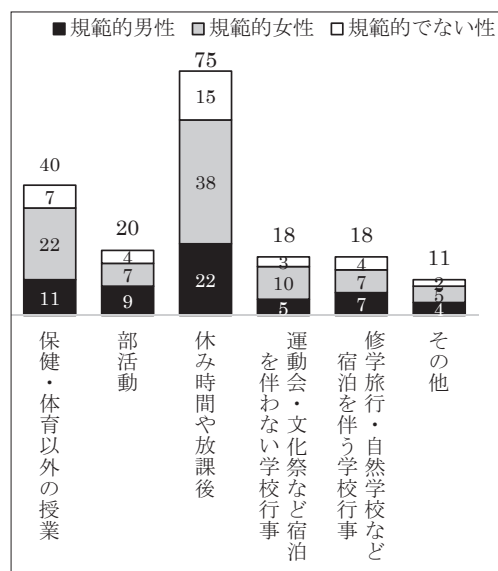


図5 性的マイノリティに対する加害見聞（保健・体育の授業以外）

表14 性的マイノリティに対する加害見聞（保健・体育以外の授業）

	ある	ない	合計
規範的男性	11 (3.0%)	355 (97.0%)	366
規範的女性	22 (4.2%)	498 (95.8%)	520
規範的でない性	7 (12.3%) △**	50 (87.7%) ▽**	57
合計	40 (4.2%)	903 (95.8%)	943

χ^2 値=10.45 Cramer's V=0.105

△: 有意に高い ▽: 有意に低い **: $p<0.01$

表15 性的マイノリティに対する加害見聞（部活動）

	ある	ない	合計
規範的男性	9 (2.5%)	357 (97.5%)	366
規範的女性	7 (1.4%)	511 (98.6%)	518
規範的でない性	4 (7.1%) △*	52 (92.9%) ▽*	56
合計	20 (2.1%)	920 (97.9%)	940

χ^2 値=8.46 Cramer's V=0.095

△: 有意に高い ▽: 有意に低い *: $p<0.05$

表 16 性的マイノリティに対する加害見聞（休み時間や放課後）

	ある	ない	合計
規範的男性	22 (6.0%)	343 (94.0%)	365
規範的女性	38 (7.3%)	482 (92.7%)	520
規範的でない性	15 (27.3%) Δ^{**}	40 (72.7%) ∇^{**}	55
合計	75 (8.0%)	865 (92.0%)	940

 χ^2 値=30.10 Cramer's V=0.179 Δ : 有意に高い ∇ : 有意に低い ** : $p<.01$

表 17 性的マイノリティに対する加害見聞（修学旅行・自然学校など宿泊を伴う学校行事）

	ある	ない	合計
規範的男性	7 (1.9%)	359 (98.1%)	366
規範的女性	7 (1.4%)	510 (98.6%)	517
規範的でない性	4 (7.0%) Δ^*	53 (93.0%) ∇^*	57
合計	18 (1.9%)	922 (98.1%)	940

 χ^2 値=8.77 Cramer's V=0.097 Δ : 有意に高い ∇ : 有意に低い * : $p<.05$

4) 性的マイノリティに対する加害経験・被害経験

「性的マイノリティに対する差別的な言動やひやかしなどをしたり，されたりしたことがありますか」という質問に対し「はい」と回答した人は「したこと」が 10 名 (1.1%)，「されたこと」が 14 名 (1.5%) であった (図 6)。

また，「性的マイノリティに対する差別的な言動やひやかしなどをされたことがある」という人の割合は，「規範的でない性」が有意に高く，「規範的女性」が有意に低かった (表 18)。

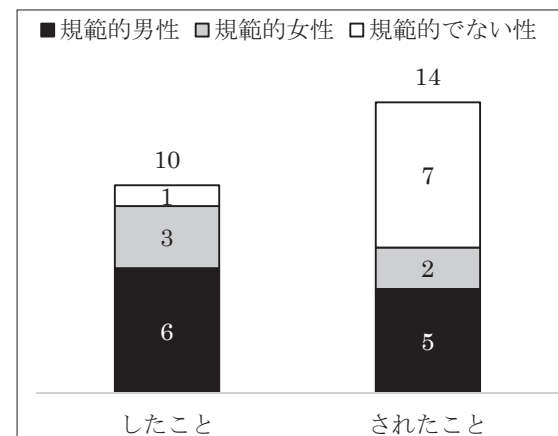


図 6 性的マイノリティに対する加害・被害経験

表 18 性的マイノリティに対する被害経験

	ある	ない	合計
規範的男性	5 (1.4%)	354 (98.6%)	359
規範的女性	2 (0.4%) ∇^{**}	519 (99.6%) Δ^{**}	521
規範的でない性	7 (12.3%) Δ^{**}	50 (87.7%) ∇^{**}	57
合計	14 (1.5%)	923 (98.5%)	937

 χ^2 値=49.449 Cramer's V=0.230 Δ : 有意に高い ∇ : 有意に低い ** : $p<.01$

(6) 体育・保健体育に対する意識・経験とジェンダー・ポリティクス

運動・スポーツ活動とセクシュアリティに関しては，過去のスポーツ経験についても，今後の関わり方についても，「規範的女性」及び「規範的でない性」に比べて，「規範的男性」が積極的に関わっていることを示す結果となった。中学校・高校の運動部活動の多くが競技スポーツで構成されており，近代スポーツの持つ特徴を内包している。つまり，「競争」や「勝利」に高い価値が与えられると同

時に、男らしさを証明する働きをすることによって「規範的男性」への参加意欲を高めることにつながっていると考えられる。一方、「規範的女性」の相対的な低さは、男性ほどには運動・スポーツ活動のジェンダー的な意味での恩恵が受けられないことが影響していると推測できる。このような傾向は、小学校までの段階からも同様に見られることが明らかにされている。片岡（2010）は、子どものスポーツ活動の規定要因を分析し、親の意識について「男の子にはスポーツ経験をして、『たくましい子』になってほしいという男性性へとつながる価値志向が明確にあらわれる」と述べるとともに、女子に芸術活動が多いことを指摘している。また、「規範的でない性」は、中学校で「途中まで所属」した割合の高さが特徴的である。このことは、「規範的でない性」は、性別二元制や異性愛主義を内包する運動部活動における居心地の悪さを感じ取り離脱したことが推測される。

運動・スポーツ活動とセクシュアリティとの関連性については、体育授業の好き嫌いや忌避感からも同様の傾向が読み取れる。学校段階を通じて、「規範的男性」は「規範的女性」及び「規範的でない性」に比べて、運動・スポーツを好む傾向が高く、嫌う傾向が低い。また、体育授業における嫌な経験については、「規範的でない性」が多く経験しており、体育授業を受けたくないと思う忌避感についても、「規範的でない性」の経験が高い結果となっている。このことは、体育授業や運動部活動の場が、性別二元制や異性愛主義に基づく構造的なジェンダー形成の空間となっており、「規範的男性」にとって優越的なジェンダー・アイデンティティを形成しうる居心地の良い場になっていることが推察できる。

（7）性的マイノリティに関する経験

性的マイノリティに関する学習経験について、小学校・中学校・高校で学習したことがある人は66.8%であった。日高（2015）の調査では、性的マイノリティについて授業で取り扱ったことのある教員は13.7%にとどまっていることを考えると、文部科学省からの通知や資料の公表などによって学校での取り組みが進展しているとともに、「学習」について学習者と教員間の認識の差も推測される。

性的マイノリティに対する加害見聞について、「保健の授業」ではセクシュアリティによる有意な差は見られなかったが、「中学校」が最も多い結果となった。セクシュアリティへの関心が高まる時期であり、指導内容に十分な配慮が必要であると言えるだろう。「保健・体育の授業以外」では、「規範的でない性」が有意に高く「見たり聞いたりしたことがある」と回答していた。その関係性については詳細な検討が必要とされるが、「規範的男性」や「規範的女性」が加害的な言動だと認識していないものでも、「規範的でない性」には加害的な内容として受け取られていることが推察できる。

性的マイノリティに対する加害経験・被害経験として、「されたこと」がある人の割合が「規範的でない性」に有意に高かった。「規範的男性」及び「規範的女性」は知識が不十分で、差別意識がないまま冗談半分で差別的な言動をしてしまうことが懸念され、早急な対策が必要と考えられる。

4. 結論

本研究の目的は、ジェンダー・セクシュアリティの観点から体育・保健体育に対する意識やそこでの経験を明らかにすることであった。調査の結果から、競技スポーツから内容構成される学校体育や運動部活動が「規範的男性」にとって居心地の良い場として機能しており、その恩恵を十分に受けら

れない「規範的女性」の参加意欲や参加率は相対的に低くなっていた。また、「規範的でない性」は性別二元制や異性愛主義を内包する近代スポーツの特徴から、体育や運動部活動に居心地の悪さを感じたり、そこから離脱する傾向のあることが推測できる。「規範的でない性」が体育や運動そのものから離脱してしまわないように、授業で性的マイノリティについて取り扱うことで、児童生徒にセクシュアリティに関する理解を促すことは重要である。保健と体育の一層の連携を図り、ジェンダー・セクシュアリティの観点から保健体育科として十分な配慮をしていくことが求められる。

付記

本研究は JSPS 科研費（基盤研究（C）課題番号 16KO1617、研究代表者 井谷恵子）の助成を受けて実施されたものである。

注

- 1) 性のあり方は、LGBT(レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー) など、多様な性的指向（性的魅力を感じる性別）と性自認（自分の性別に対するイメージ）から説明されている。性自認は、身体の性と心の性の両面から考える必要があるため、身体性の性・心の性・性的指向という3側面から説明されることも多い。身体性の性と心の性が一致し、異性を好きになるという規範的な性とは異なる存在を一般的に性的マイノリティと呼称している。国際的には、マイノリティ（少数者）と呼ぶことに対する懸念があり、多様な性のあり方を SOGI (Sexual Orientation, Gender Identity) と表現している。

文献

- アスキュー, S.・ロス, C.: 堀内かおる訳 (1997) 『男の子は泣かない——学校でつくられる男らしさとジェンダー差別解消プログラム』金子書房。
- 電通 (2015) 電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT 調査 2015」を実施. <http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html> (2018.4.16 参照)
- 藤原直子 (2018) 総論：脱異性愛主義を目指して. 飯田貴子・熊安貴美江・来田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, 166-167.
- 井谷恵子 (2018) 体育カリキュラムのポリティクス. 飯田貴子・熊安貴美江・来田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, 34-35.
- 井谷恵子・井谷聡子 (2016) 性的マイノリティへの対応からみた学校体育のジェンダー・ポリティクス. 日本体育学会第 67 回大会発表資料.
- 井谷聡子 (2018) 二つの性に分けられぬ身体. 飯田貴子・熊安貴美江・来田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, 170-171.

- 日高庸晴（2013）教員 5979 人の LGBT 意識調査レポート．（2018.4.14 参照）<http://www.health-issue.jp/kyouintyousa201511.pdf>
- Human Rights Watch（2016）出る杭は打たれる 日本の学校における LGBT 生徒へのいじめと排除．
- 片田孫朝日（2008）「体育指導における性別カテゴリーの使用-高校体育の持久走授業の場面記述から」
スポーツとジェンダー研究 Vol.6 pp.30-41．
- 片岡栄美（2010）「子どものスポーツ・芸術活動の規定要因 -- 親から子どもへの文化の相続と社会化格差」
研究所報 58:10-24
- 木村涼子（1999）『学校文化とジェンダー』勁草書房．
- 文部科学省（2014a）平成 25 年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査結果，文部科学省ウェブサイト．
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1342657.htm（2018.4.14 参照）
- 文部科学省（2014b）学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について，文部科学省ウェブサイト．
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf（2018.4.14 参照）
- 文部科学省（2015）性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について，文部科学省ウェブサイト．
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468（2018.4.14 参照）
- 文部科学省（2016）性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け），文部科学省ウェブサイト．
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/1369211.htm（2018.4.14 参照）
- 森山至貴（2017）『LGBT を読み解く-クイア・スタディーズ入門』筑摩書房．
- 中西絵里（2017）LGBT の現状と課題—性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き—．立法と調査 2017. 11 No. 394．参議院常任委員会調査室・特別調査室．
- 日本スポーツとジェンダー学会編（2016）『データでみるスポーツとジェンダー』八千代出版．
- 多賀太（2005）教育における「男性」研究の視点と課題—「男というジェンダー」の可視化—．教育学研究 72(2):174-185．
- 田中統治（2000）「カリキュラムと教育実践」藤田英典・志水宏吉編『変動社会のなかの教育・知識・権力』新曜社，386-408．

